

## 日本の人々を襲った巨大地震

## Great earthquakes that hit the people of Japanese Islands

# 寒川 旭 [1]

# Akira Sangawa[1]

[1] 産総研 活断層研究センター

[1] Active Fault Research Center,GSJ/AIST

日本列島は、大きな地震を伴う地殻変動によって造られた島国である。そして、私たちの祖先は、地震によって命を奪われ、家を壊されるという悲しい出来事を乗り越えながら、今日の豊かな文化を築きあげてきた。

過去の地震を振り返り、人々がどのような被害を受けたかについて知る手段の一つが文字記録である。日本では、過去千数百年間の様々な出来事が記録されており、これらから多くの情報を得ることができる。一方、我が国では、考古学の遺跡発掘調査が盛んに行われており、最近では、遺跡で見つかった地割れや液状化現象の痕跡を使って過去の地震を調べる「地震考古学」というユニークな分野が誕生している。

私たちの祖先を悩ませた巨大地震として、太平洋側海底のプレ-ト境界から発生する関東地震・東海地震・東南海地震・南海地震があげられる。フィリピン海プレ-トの潜り込みに伴う地震で、お互いに関連を保ちながら繰り返し発生している。記録をさかのぼれば、日本最古の歴史書『日本書紀』にも、南海地震で山が崩れて家が倒れ、津波が押し寄せたことが書かれている。そして、5代将軍綱吉の時代には、1703年に関東地震が発生し、4年後の1707年に東海～南海地震が同時に起きて、一ヶ月半後に富士山の宝永火口から噴煙が登っている。巨大なモンスターたちが、示し合わせたように活動したのである。

一方、記憶に新しいのが1995年の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）である。その後も、新潟・鳥取・福岡などで内陸の地震が相次いでいる。これらは、日本列島の岩盤に出来た「活断層」と呼ばれる大きな傷から発生する地震である。日本列島には顕著な活断層だけでも百以上あり、まさに、傷だらけの島国と言えよう。そして、兵庫県南部地震を機に、これらの活断層を発掘して、活動の履歴を調べるというプロジェクトが始まり、多くの成果が得られている。

活断層との縁が深いのが豊臣秀吉である。彼は、内陸の大型地震に2回も出会った。1586年に中部～近畿東部地域を襲った「天正地震」の時は、琵琶湖の南西岸で被災した。この地震は中部地域の阿寺断層系や養老・桑名・四日市断層系が引き起こした大型地震で、飛騨白川郷の帰雲城は山崩れによって姿を消した。10年後の1596年には有馬-高槻構造線活断層系や淡路島の活断層が「伏見地震」を引き起こして、京阪神・淡路地域が大きな被害を蒙った。この時、秀吉のいた伏見城が倒壊して、私邸で謹慎中だった加藤清正が救援に駆けつけた話はよく知られる。

活断層の発掘（トレンチ調査）によって活動した断層がわかるが、考古学の遺跡からも多くの痕跡が発見されている。伏見地震の場合、京都の木津川河床遺跡では液状化現象によって大量の砂と小石が地面に流れ出し、神戸の住吉宮町遺跡では井戸の上半分が2 mも横に滑り動いてS字型の井戸となり、継体天皇の陵墓である今城塚古墳は墳丘の大半が地滑りで崩れ落ちた。

その他、『日本書紀』に詳しく記述された最古の地震である679年の筑紫地震は、久留米市の水縄断層系の活動で生じたことがわかった。1611年の会津地震では、川が塞ぎ止められて湖が生じ、水没した越後街道が移転することになった。1855年に江戸の直下で起きた「安政江戸地震」では「ナマズ絵」が登場して、全国に広まった。

文字記録と発掘成果を中心に、歴史上のエピソードを盛り込みながら、日本列島の地震史の一端を紹介したい。